はるかな尾瀬

2008.06 vol.5
(財)尾瀬保護財団

VOL.5 2008.06

目　次

01 理事長あいさつ
かけがえのない尾瀬を
未来に引き継ぐために

02 リレーエッセイ
したたかな植物　ミズバショウ

04 エッセイ　尾瀬好日
尾瀬認定ガイド
楽しんで尾瀬ボランティア

06 現地情報
原をわたる風だより
おこじょだより

08 連載コラム
『尾瀬では心のふれあいを大切に…』
『見晴回顧録』

10 トピックスTOPIX
(財)尾瀬保護財団
平成20年度事業計画について

11 尾瀬ボランティア情報
新職員紹介

12 尾瀬保護財団からのお知らせ
寄付のお願い
「友の会」コーナー
イベント情報

尾瀬のミニ観察(1)

ーサワギキョウー
(花期：7月下旬～8月下旬)

紫色が美しいサワギキョウの花に触れてみよう。

花びらは手の指のように5つに裂けて、マルハナバチが来るのを待っている。花びらの上に弓のように伸びているのが、雄しべだ。穂の上の方に咲いている花の、雄しべの先を指で3秒ほどそっと触れていると、白い花粉がもこもこと湧き出てくる。虫メガネだとよく見える。こうやって、ハチが来たときに花粉を渡すのだ。

(田中　肇)

「今月の表紙」

研究見本園のミズバショウと至仏山

かけがえのない尾瀬を未来に引き継ぐために

財団法人尾瀬保護財団
理事長　大澤　正明

昨年8月に29番目の国立公園として「尾瀬国立公園」が誕生してから初めての山開きが行われ、いよいよ多くのハイカーが訪れる待望のシーズンが始まりました。雪解けとともに咲き始めるミズバショウや夏の湿原を一面に彩るニッコウキスゲ、湿原が草紅葉に燃える秋など尾瀬の自然は多くの人の心をとらえて離しません。

しかし、この豊かな自然も昭和30年代の利用者増加によるアヤメ平などの荒廃、昭和40年代のゴミ問題やマイカー利用による環境負荷の増大など多くの課題がありました。しかし、多くの関係者の努力により、その都度対策がとられ、尾瀬は自然保護の原点といわれるまでになっております。

私も悠久の時をかけて形成されたこの尾瀬の自然を後世に残していく努力を続けて行きたいと考えていますが、尾瀬を訪れる方々にも、貴重な自然を保護する意識を高めていただけたらと思っています。

今年は、尾瀬国立公園の誕生を記念して、「尾瀬国立公園記念シンポジウム」や「自然公園ふれあい大会」が尾瀬を中心に開催されます。このような取り組みを関係者の皆様が協力しながら実施することで、尾瀬に関する情報発信にとどまらず、豊かな自然とふれあう感動や未来に残すことの大切さを、多くの方に伝えていきたいと考えています。

さて、平成7年に設立された当財団は、行政、土地所有者、山小屋、ボランティア、地元の方々など尾瀬に関する多くの関係者との情報交換や連携を図りながら、尾瀬の保護と適正な利用の推進を図るため、利用者に対するマナー啓発、自然解説活動、荒廃湿原の植生復元、ビジターセンターの管理・運営、各種情報提供、顕彰事業など様々な事業に取り組んでまいりました。しかし、課題はまだまだあります。

まず、「認定ガイド制度」の創設です。尾瀬は、豊かな自然とふれあいながら自然への理解を深め、守り、引き継いでいくことの大切さなどを学んでいく場として最適ですが、それらを伝えるガイドについては、個人の資質に依る部分が多く、知識や技術に差がありました。そこで、ガイド団体を中心とする「尾瀬認定ガイド協議会」を設立しました。今後は質の高い環境教育やエコツアーを実施できる尾瀬にふさわしい優れたガイドを養成していく予定です。

次に、植生の荒廃がすすんでいる至仏山の保全対策です。昨年度に引き続き、東面登山道を上り専用として利用する対策などを継続して実施していきます。

今年も尾瀬のミズバショウは華麗に咲き渡りました。このミズバショウに代表される尾瀬の植物、動物、そして尾瀬という自然環境は、私たちにとってかけがえのないものです。「みんなの尾瀬を　みんなで守り　みんなで楽しむ」。これは、平成18年11月に策定された尾瀬の保護と利用のあり方の方針を示した「尾瀬ビジョン」の基本理念です。この基本理念に沿って、いつまでも尾瀬が国民の宝としてあり続けられるように地域と関係者が一体となって、尾瀬を守り、そして適正利用を推進する「21世紀の新しい国立公園」を目指していきたいと考えています。

今後とも、当財団の運営に対し、皆様の変わらぬ御支援をお願い申し上げます。

リレーエッセイ

したたかな植物 ミズバショウ

田中 肇

ミズバショウに初めて向きあったのは、NHKのハイビジョン取材に同行した、福島県の仁田沼（にたぬま）である。ディレクター氏の「花粉を運ぶのは何ですか」という、質問の答えを知らなかった。でも、美しく咲き競うミズバショウの花を前に、何か答えを出し映像にせねばと、湿原に沿った小路を歩きながら花を観察した。白い苞と中に立つ円柱形の穂の形から、虫媒花だと考えて昆虫の姿を求めたが、黒いハエがいただけだった。そして、9トンもある車から山の中を1kmもケーブルを延ばしての撮影は、ハエを写して終わった。ハイビジョン黎明期の1988年ことだ。

私の専門は花生態学、雄しべで作られた花粉が何に運ばれて雌しべに到達するのか、花の形や環境などとの関係を明らかにする分野だ。そして、1994年から4年間の尾瀬総合学術調査に参加する機会に恵まれた。そこでミズバショウの受粉方法も明らかにしようと、まず木道を歩きながら花の中を観察し、昆虫の姿をさがした。甘味を含んだ軟らかな香りと白く大きな苞に見合った美しい昆虫を期待したが、いたのは仁田沼と同じハエだけだった。おおよそ、36個の花に1匹の割合でとまっていた。ハエたちは緑色の穂に止まって、その表面をなめていた。そこに蜜でもあるのかと、ルーペで観察したり、なめたりしたが、蜜の感触はなかった。普通、蜜のない花では花粉が昆虫の餌となるが、ハエたちはミズバショウの花粉を食べようとしない。何がハエを誘うのかはいまだに不明だが、花粉を媒介する昆虫はハエだと結論できた。

このような観察をしているとき、風がさっと吹き去って、黄色い花粉が煙のように散った。それを見て、花粉は風でも雌しべに運ばれるに違いないと気づき、確認することにした。小さなガラス板に粘着テープを貼った花粉捕捉器を複数用意し、棒の先にとりつけ、ミズバショウの花から10cm・20cm・30cm離して、花穂と同じ高さに立てた。約28時間後に回収し、テープに付いた花粉を顕微鏡で数えた。その結果、風下では30cm離したテープでも、1㎠に241個もの花粉がついた。これは、一昼夜で雌しべの4分の1は花粉を受け取れる数である。ミズバショウは風を介しても受粉しタネを作れることが分かった。

そのうえ、ミズバショウの花は雄しべが雌しべの上で裂けて、直接花粉をつける。この花粉でタネができるか否かを知るため、苞が開く前に紙袋で穂全体を覆い、ハエや風が花粉を運んでこないようにした。2ヵ月後に回収して、7個の穂を調べたら、穂を構成する個々の花の3分の1がタネを作っていた。

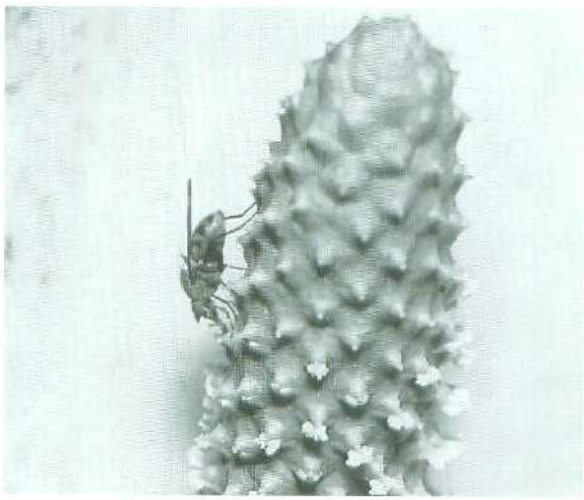
立秋を過ぎると、ミズバショウの実は熟して黄色味を帯びる。その実は雨が続いたり、水につかったりすると、崩れて褐色のタネを落す。落ちたタネは水に浮いて流され、散っていく。しかし、タネの散布を水流だけに頼っていたのでは、山は越えられない。いかにして山越えをするのだろうか。

そのころ、クマが湿原に出てミズバショウの実を食う。その黒く大きな糞塊の表面には、ミズバショウのタネの皮がはりついている。臭さを我慢して、糞の中を探ると無傷のタネが出てくる。酸性の強いクマの消化管を通ったタネは発芽力を失っているだろう、と言う人がいた。でもそのタネが発芽すれば、クマがミズバショウのタネを運ぶことになる。そこで、糞の中の

タネを10粒持ち帰り、湿らせたミズゴケの上に置き、暖かく保った。すると23日後までに、7個のタネから可愛い芽が出た。クマの消化管を通っても、ミズバショウのタネは発芽できるのだ。果肉やタネの多くはクマの栄養として消化吸収されてしまう。しかし、ほんの一部だが生きたまま糞と共に撒き散らされるタネがあるからこそ、ミズバショウは山頂近くの沢にも運ばれ、山を越えることもできるのだ。このように、クマとミズバショウは共生関係にあったのだ。クマによるタネの散布は、それまで知られていなかった新発見だったので、早速1977年の植物研究雑誌に発表した。

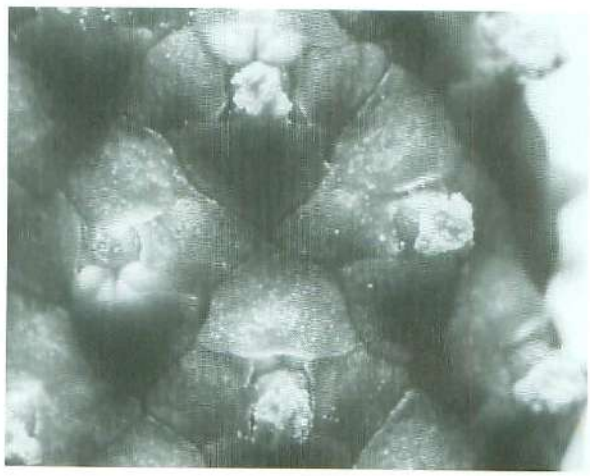
美しい花を咲かせているミズバショウ、それは三つもの受粉方法を駆使してタネをつくり、その散布に水流やクマを利用するなど、したたかな生命力と素晴らしい知恵を秘めていた。尾瀬総合学術調査に参加でき、これらの事実を最初に解明し発表する機会を得たことを、たいへん幸せに思っている。

筆者紹介
田中　肇（たなか　はじめ）
フラワーエコロジスト
専門は花生態学
著書は「花と昆虫がつくる自然」（保育社）
尾瀬の花の生態を多く取上げた）、「花の顔」
（山と渓谷社）ほか多数



▲ミズバショウの花穂をなめているハエ

▲クマの糞、ミズバショウのタネが見える



▲雌しべの上で花粉を出している雄しべ

エッセイ 尾瀬好日

「尾瀬認定ガイド」

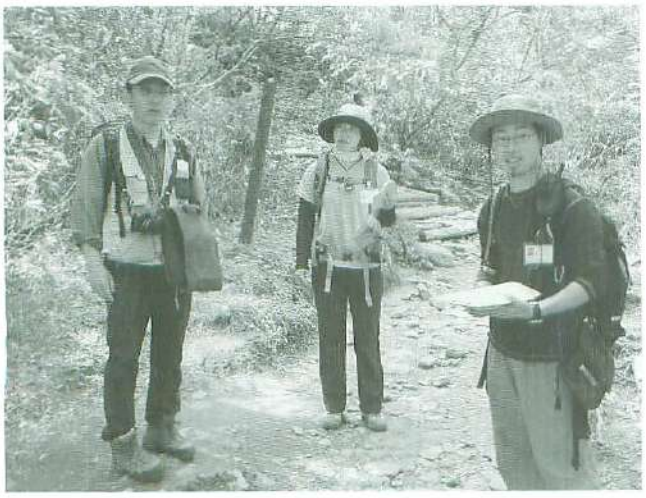
片品山岳ガイド協会
事務局長　塩田　政一

今年1月29日の読売新聞群馬版記事「ニュースの断面」の真ん中に、ポカンとした顔の3人の写真があって「若者らに尾瀬の植物について説明するベテランガイド（左、2007年6月19日）」の説明がついており、タイトルは「尾瀬に公式ガイド制度」。すでに公式ガイド制度を始めている北海道や屋久島などの例を引いて、昨年9月から2回開かれた尾瀬認定ガイド研究会について触れ「まだ認定する機関も決まっていないし、この5月に設立予定の協議会のメンバーの選定をめぐっては今後難航も予想される」とありました。

昨年の6月18日にガイド協会の事務所で若い連中から「明日暇でしたら鳩待峠の樹木を教えていただけませんか」との誘いを受け、翌日鳩待峠を9時に出発。入山者数を調べるセンサーの直ぐ左は「タカネミズキ」続いて「ウワミズザクラ」両側に「テツカエデ」階段右側「ダケカンバ」降りて左右に「ハウチワカエデ」「ブナもあるけど分っているからいいよな」右側「ノリウツギ」左「ウワミズ」続いて花弁4枚「オオツリバナ」、と、奥利根自然センター所長の内海廣重さんが通り掛かって立ち話。内海さんの同行者にレンズを向けられ「ピース」をする間も無くシャッターが押されました。このときの写真です。当時は記者のT氏とはあまり面識がなく、今ならにっこり笑ってカメラに納まったのですがちょっと残念。

山ノ鼻まで81種、お昼を少し過ぎました。再確認しながらまた3時間かけて鳩待峠へ。事務所に戻ってコースの概略を書かせ、そこに1本ずつ落とさせて、A4・3枚のシャレた樹木の案内図が出来上がり、コピーして会員は無論のこと、頼まれていたビジターセンターでのボランティア講座の資料に使ったり尾瀬林業さんに配ったりで好評でした。それが東京電力水利・尾瀬グループのS氏の目に留まり、使わせてほしいとのこと。「学名とその意味を調べると楽しいですよ」の小生の助言どおりに尾瀬林業さんの手でカラー写真付きのファイルが作られ送られて来ました。この5月22日、今ひとつ不安だったアオダモかミヤマアオダモかをS氏と尾瀬林業さんのM氏との3人で調べに歩き、鳩待峠と山ノ鼻間は全部ミヤマアオダモでした。この秋には小冊子になって皆さんの手に渡るかも知れません。そしてひとつ発見、いや、今まで気づかなかったというのが正解ですが、山ノ鼻近くにトウヒがあるのをご存知でしたか？　S氏が「あの木は？」というので近寄って見ればトウヒの毬果が落ちています。「よく見る」というのは大切なことですね。再認識させられました。

この5月20日、尾瀬認定ガイド協議会は、幸いにもT氏の予想がはずれ、さほどの難航もなく無事設立されました。内海さんが顧問に就任されたのは良かったのですが、なんと小生がその会長です。



▲新聞に掲載された写真

エッセイ
尾瀬好日

「楽しんでボランティア」

尾瀬ボランティア
登坂　重夫（NO.179）

私が、尾瀬に初めて行ったのは43年前のことでした。当時は交通の便も悪く尾瀬ヶ原に行くには午前2時半か3時頃から歩き出した。暗闇のなか懐中電灯をつけて、富士見下から富士見峠、長沢新道を通って尾瀬ヶ原のコースだった。途中アヤメ平に立ち寄った記憶がある。

尾瀬に行くと言うのは登山で長時間の歩行が必要であり登山者は20代の若者が殆どでした。登山道には懐中電灯の長蛇の列でき、木立に見え隠れする光はとても幻想的な光景でした。

今でも忘れられない光景は、長沢新道の途中で初めて見た朝靄の間から見えてきたニッコウキスゲです。日が昇るにつれ朝靄が晴れ黄色い絨毯を引き詰めたような尾瀬ヶ原を見たとき、こんな山の中に何でこんな所が有るんだと、興奮し、感動したことを思い出す。

自分にとって尾瀬は、訪れるその時々により幾通りもの感動を与えてもらえる、だからこれからも尾瀬通いは続くだろう。

私が尾瀬ボランティアを始めてから12年が過ぎました。不安を抱きながらのボランティア活動のスタートでしたが、ボランティア仲間に恵まれアッと言う間の12年間でした。

12年も尾瀬に通い続けられたのは、尾瀬は高山植物の宝庫だから、国立公園、特別天然記念物だから、だけでは語り尽くせない何かがある。

ボランティアの当日は、戸倉駐車場で乗り合いタクシーの運転手さんと「おはようございます」、「今日もまたきたね」とこんな挨拶から始まります。鳩待峠につくと山小屋の人から「今日もがんばってるね」などと声をかけられる。私は、尾瀬に関わる色々な人とのふれ合いも楽しみの一つでボランティアが続いている。

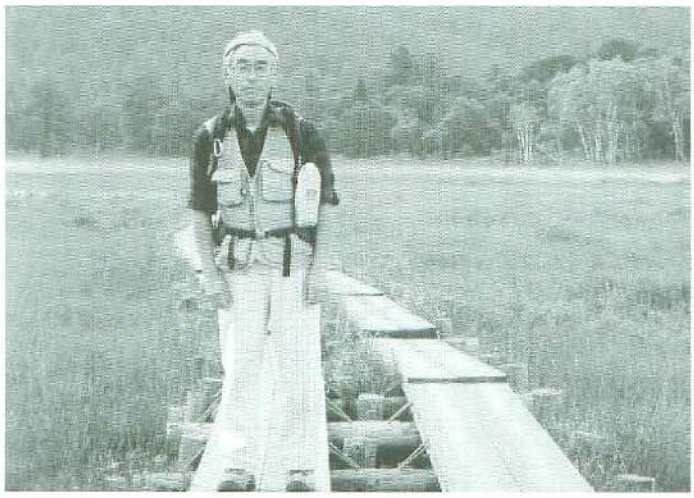
尾瀬を訪れる人とのふれあい。「おはようございます」「気をつけて行ってらっしゃい」と、こんな挨拶が交わせる尾瀬の朝は気持ちがいい。

ボランティアとしては、入山する人に守ってもらいたいマナー、花の開花情報など伝えている。時には、熊の出没、大雨による木道の冠水、流失による木道の通行禁止箇所等の情報も伝えることもある。

「日本有数の高層湿原である尾瀬は、四季それぞれに楽しめる」このような言葉で、尾瀬は紹介されるが、まさにその通りだと思う。多くの人が訪れる尾瀬ヶ原はもちろんだが、針葉樹林に囲まれた尾瀬沼、特に小雨にけむる尾瀬沼は神秘的ですばらしい。

尾瀬は花を楽しむだけでなく、オコジョに代表される小動物も多い。尾瀬ヶ原では、トンボ、池塘のなかにはアカハライモリなど沢山の生き物がいる。トンボ、小鳥に出会うには、平日のんびりと尾瀬を探索するのが良い。

尾瀬を訪れる1人1人がマナーを守りこのすばらしい自然を後世に残したいものです。



▲尾瀬ケ原にて

現地情報

原をわたる風だより

新たなシーズンのはじまりです

標高1400mの尾瀬ヶ原でもシラカバが目に優しい新緑に芽吹きはじめ、湿原ではミズバショウが咲く時期となりました。暖かい日が続き、霜にあたらなかった真っ白なミズバショウや7月上旬には白い綿毛となるワタスゲの黄色い花がいたるところで見られます。とりわけワタスゲは例年より多いようで、初夏の一面の白い絨毯を想像すると楽しみになります。

▲尾瀬ケ原

▲山の鼻ビジターセンター開所　フルート奏者パベル氏と

ビジターセンターでは5月11日に財団職員や山小屋関係者、尾瀬ボランティアが参加して開所式が行われ、スタッフ9名で本格活動を開始しました。開所式では昨年に引き続き群馬交響楽団のフルート第一奏者パベル氏による演奏が行われ、透き通る音色に耳を傾けました。

尾瀬国立公園が誕生して初めてのシーズンである今年は、多くのハイカーが訪れると思います。最新の自然情報や登山道状況を提供して尾瀬の保護と利用を理解していただき、ご協力いただけるようスタッフ一同で努めたいと思います。更に、利用しやすい展示内容へのリニューアルや企画展示、新しい試みであるミニツアー等業務の充実を図り、来訪者に魅力的な尾瀬を楽しんでいただけるよう準備をしておりますので、気軽にお立ち寄りいただき活用をしていただきたいと思います。

（所長　角田　文彦）

ミニツアーはじめました！

今年から、尾瀬の自然を守るための取り組みを解説する「尾瀬の自然ミニツアー」が始まりました。内容は山の鼻ビジターセンター近くの研究見本園での自然観察と、山ノ鼻公衆トイレの見学です。今までの自然観察会との違いは、自然観察だけにとどまらず、尾瀬の貴重な自然環境を守るための取り組みを、公衆トイレという身近な存在を通して知ってもらうことです。

私は、今年の5月から本格的に尾瀬で環境学習の仕事に従事していますが、尾瀬の自然にじっくりふれるほど、その貴重さ、大切さを身にしみて感じることができています。ミニツアーの参加者に公衆トイレの廃棄物をヘリコプターで尾瀬の外に運び出しているということを伝えると、皆一様に驚いています。

これからも、尾瀬の自然の美しさ、貴重さと、環境を守る事の大切さを伝えていきたいと思います。

（落合　清勝）

＊朝の自然観察会も引き続き行っています。開催日・時間等をご確認のうえ、どちらもご参加をお待ちしています。申し込みは不要、参加はもちろん無料です。＊

▲尾瀬の自然ミニツアー

現地情報

おこじょだより

皆さんの来訪を待ってます♪

今年の尾瀬沼ビジターセンターは5月1日にオープンしました。7名のスタッフはこれから半年間尾瀬の中に住み込み、来訪した方々に尾瀬の素晴らしさや大切さをお伝えする仕事を行います。

スタッフたちはプライベート空間の無い、文字通り寝食を共にしながら、尾瀬漬けの毎日を送ることになります。それでもスタッフ一同、日々移り変わる尾瀬の自然を誰よりも近くに感じられるという状況を楽しみながら、皆さまに様々な尾瀬の姿をお知らせしたいと考えています。

スタッフも増員され、観察会や展示物もパワーアップする予定ですので、ぜひぜひ尾瀬沼ビジターセンターにお立ち寄りください。

（総括責任者　安類　智仁）

▲尾瀬沼に来たらぜひお立ち寄りください

尾瀬の赤い雪 ～春の風物詩～

南からやって来たイワツバメたちが春の訪れを知らせる頃、冬の眠りから覚めた尾瀬沼の氷は徐々に溶け始めます。尾瀬にはその時期だけに見られる特別な風景があるのをご存じですか？

それは尾瀬地方の方言で「アカシボ」といわれる風景で、「赤雪」などとも呼ばれます。

「赤い雪」と聞くと真っ赤に染まる鮮やかな色を連想するかもしれませんが、実際は赤褐色の錆びた鉄のような色です。5月上旬の雪どけの頃、尾瀬沼の水が完全に溶ける前のほんの一瞬にもっとも美しく見られます。特に夕日が雪原を照らすと、いっそう赤く輝きドラマチックな景色が広がります。

ところでこのアカシボ現象、原因は諸説考えられていますが、最近の研究では湿原に存在する緑藻類の休眠胞子が関係していると報告されています。雪解けの季節になると土壌と雪の間の層に水の流れが生じます。この流れに沿って緑藻類が雪の中を移動し地表に出てくるために、雪が赤褐色に着色されると言われています。また、この時期になると雪原からまるで噴火したように赤い雪が噴出している様子が見られます。これは胞子の運ばれる流れの先に堰のようなものがあると、そこから緑藻類を含む赤色の雪が地表に勢いよく湧き出すために見られる現象です。

春先、まだ眠りから覚めていないかのように見える自然の中で、小さな小さな生命の作り出す色が、見る人を引きつける幻想的な風景を作り出しているのですね。

（参考文献：山本鎔子ほか　2004　陸水学雑誌　Japanese Journal of limnology）

（佐々木　奈美）

新天地へ・見晴

早いもので、見晴休憩所に着任してから1ヶ月少々が経とうとしています。来たばかりの見晴は、まだ雪深く山小屋さんも3軒のみの営業で閑散と淋しいものでしたが5月14日には残り3軒がそろって入山し、いよいよ尾瀬の賑わいを感じ始めました。今年は雪解けが早くお花や鳥たちも活発で、短いシーズンを駆け抜ける勢いです。

私も昨年までの山ノ鼻とは違った尾瀬を感じ皆様に伝えられればと思いますので、休憩所に是非お立ち寄りください。

（西口　俊一）

沼人（ぬもうど）の本音

このコーナーでは、尾瀬沼のほとりで暮らす尾瀬沼人、通称沼人たちの本音にせまってみたいと思います。第一回のテーマは尾瀬沼生活必需品はズバリこれだ！です。

まずは当然かなと思われるのが、

長靴

●散歩も上下山も登山も仕事も長靴。脱ぎ履きが簡単で便利。夏に蒸れるのが難点（Iさん）

●これがないとリヤカーもひけないし、ぬかるみも歩けない。登山靴はヒモを結ぶ手間が…ゴム製はひび割れるのでビニール製を愛用。底の薄さは中敷で対処（Kさん）

●においが好き（別のKさん）

う～ん、さすが尾瀬の達人たちですね。においは…私にはわからないけど、他には

携帯電話（使えませんけど…）

●下界にファミリ～がいるから連絡にはぜひ携帯が必要（Aさん）

●情報収集（Hさん）

酒

●尾瀬の長い夜には酒でしょう。尾瀬で飲む酒が一番！（Tさん）

思いやり

●半年間の天上界暮らし、やっぱりわしらが向きあっとるのは人ですけえの。（Sさん）

家族のある人には連絡方法がない尾瀬は大変です。Sさんの言葉は素敵なのでそのまま載せました。

皆さん顔出しNGなのが残念！

あなたの必需品は何ですか？

（小山　抄子）

■連載コラム　『尾瀬では心のふれあいを大切に…』

尾瀬から学ぶスローライフ　取材協力＝萩原　博美さん（片品村遭難対策救助隊副隊長）

「今年の残雪の様子はどうだろうか」と、尾瀬を訪れる登山者の安全を常に心配している存在が「片品村遭難対策救助隊」です。尾瀬を筆頭に日光白根山や上州武尊山等も活動エリアとしている片品村遭難対策救助隊は今年で発足48年。そんな救助隊の副隊長として活躍されている萩原博美さんに、救助隊の活動内容についてお話を伺いました。

地元メンバーで構成

「私は水上町（現みなかみ町）出身ですが、昭和49年に片品村の戸倉に移り住みました。当時すでに地元スキークラブメンバーを中心に救助隊がありましたが、隊員だった義父が地元区長をやっていたこともあり、義父の代理として出役することが多くありました」と、救助隊副隊長として出席していた尾瀬山開きから戻った萩原さんが話し始めてくれました。

「救助隊は尾瀬班・白根班・武尊班に分かれており、それぞれの地元メンバーで構成されています。私は尾瀬班に所属していましたが、昭和50年代は残雪期の至仏山での遭難が多く、特に下山途中での事故が目立ちました。捜索には大人数が必要で、至仏山の行方不明者が富士見峠で見つかったこともありました。こういった状況を受けて、主な活動のひとつとして赤布等の目印付けを行っています。その他にも登山道沿いの刈り払いや定期巡視等も行っています」

▲救助隊員たち（ヒマラヤ遠征時のもの）

探し出すんだという気持ち

「救助隊メンバーは専属ではなく、全員が自分の仕事を持っています。報酬はわずかでボランティア的なものです。一方で救助依頼は前夜に突然入ることが多く、本業のやり繰りに苦労するのも事実です。ですが助けを求めている登山者を、早く助け出してあげたいと自然に体が動きます」と萩原さん。これまでの救助経験で忘れられないものとして、至仏山での捜索があるという。

「昔は夜行列車で尾瀬に行く途中で知り合い、一緒に登山するという『にわかアベック』が多くいました。ですがお互いをよく知らないまま登山し、遭難し、山中に残してきた女性のことを聞いても場所も素性もわからない。やっと発見した時には着替えの入ったザックを抱え、びしょ濡れの状態で遺体として見つかりました。男性が付き添っていればと今でも思い出します。いつも家で待っているご家族の事を考え、『なんとしても探し出してやる』と思います」

これまで多くの救助に関わってきた萩原さんならではの、強い思いを感じた話でした。

▲必死の捜索活動を行う救助隊（尾瀬沼周辺）

心のふれあいを大切に

必死に救助を行い、見返りを求めない隊員たちも、送られて来るお礼の手紙に励まされるのだという。

「手紙からは本当の気持ちが伝わってきますし、それが一番うれしいです。尾瀬だけではありませんが、山では心のふれあいが大切ですし、また必要だと思っています。私も一人の登山者として尾瀬を訪れています」とうれしそうに話してくれました。そんな萩原さんに尾瀬登山についてのアドバイスを伺った。

「装備や体調を整え、余裕のある計画を組むことはもちろんですが、天候に悪態をつくことなく、その場を楽しむという気持ちを持ってもらいたいです。尾瀬や山で起こる様々な出会いを大切にしてください」と、多くの登山者が行き交う片品村に住み、誰よりも登山者の安全を願っている萩原さんや他の隊員も、やっと迎えた尾瀬シーズンを心待ちにしているようでした。

▲隊員歴35年の萩原さん

続・山小屋主が語る尾瀬の秘話

取材協力＝尾瀬小屋（福島県檜枝岐村）

見晴地区では雄大な至仏山を背景に広大な尾瀬ヶ原を見渡すことができ、四季折々の尾瀬ヶ原を感じることができます。見晴地区で山小屋を営みながら、尾瀬を訪れる登山者に尾瀬の魅力を伝え続けてきた星光さんにお話を伺いしました。

見晴で山小屋を建設した頃

「もともと、父・重郎が沼尻で山小屋の建築を考えていましたが、昭和32年にここ見晴で山小屋を建築することになりました。当時の厚生省の許認可を受け、仮設小屋を作るために、温泉小屋から通っていました。その仮設小屋に大工さん達、建築木材を切り出す人達が泊まり、山から木材を切り出し、山小屋を建設し、昭和33年に尾瀬小屋を開業しました」と、今シーズンの営業を開始したばかりの尾瀬小屋で、星さんは話し始めてくれました。

「開業した当時、私は中学校に入った頃だったので、学校の夏休みを利用して、山小屋を手伝いに来ていました。ランプのホヤ掃除、小屋の掃除や荷物運びなどをしていました。その中でも、荷物運びは大変でした。米を中心とした荷物は、檜枝岐村から中継地である西田代までは村の人に運んでもらい、西田代までは小屋から取りに行っていました。米を一斗缶に入れて運んでいましたので、とても大変でしたね。米を運ぶことが大変な頃でしたから、当時の宿泊者は、一人あたり米3合を山小屋に持って来ていただき、玄関に大きな金タライと升があり計っていました。多く持ってきていただいた宿泊者からは山小屋で買い取ったりもしていました。自炊をする方も多かったですね。自炊場があり、薪1束を30円くらいで売っていました」と、当時の様子を懐かしむかのように、話を続けてくれました。

「仕事の合間には、友人と池塘の浮島の上に乗って遊んだり、六兵衛堀でイワナ捕りなどをして楽しい時間も多かったですよ。当時はまだ湿原に入れましたから」と昔の思い出を微笑みながら紹介してくれました。

▲池塘で遊ぶ星さん
（尾瀬小屋提供）

山小屋主になる前の頃（昭和40年代）

「シーズン中は、山小屋を手伝っていましたが、冬は、苗場スキー場や黒姫スキー場などのスキー学校でスキーを教えていました。回転技を取り入れたアクロバットスキーなどもしていました。妻・育子ともスキー場で出会いました。山小屋の営業はその頃が一番忙しくて大変でした。6月第1土曜日は600名近い宿泊客があることもあり、周りの宿も満室で、宿泊できないお客さんを警察が見晴の各山小屋に割り振っていたこともありました。本当に忙しかったので、お客さんが多い日が過ぎるとほっとしました。今思い出すと、よくやったなぁと思います。」

山小屋主として　尾瀬の変化を感じること

そんな多忙な頃であった昭和49年に父・重郎さんに変わって、山小屋主になり、現在まで見晴で山小屋を営業しながら、尾瀬を見つめてきた星さん。尾瀬の変化を感じることについて伺うと、

「尾瀬を眺めると周囲の山々は変わりありません。しかし、小屋前の湿原にも多くの池塘がありましたが、湿原の乾燥化が進み池塘がなくなっていきます。そして、現在、最も困っている事は、ニホンジカの増加です。ニホンジカは湿原を掘ってミツガシワの根やニッコウキスゲの芽や花を食べ、ミツガシワのきれいだった場所はほとんど見られなくなっています。早急な対策が必要です。登山者に関していうと、昔はオゼニストなどと呼ばれる若い女性や若者のハイカーが多く、山の歌を唄い賑やな夜を過ごしていました。今は年配の方が増え、転倒等でのケガ人が多くなっています。尾瀬は、標高が高い山なので、持病のある方、心臓病、血圧の高い疾患の方は登山前に検査し異常がない時に入山して頂きたいです。登山グループのリーダーの方には、安全に配慮して登山してほしい」と、最近のハイカーのケガや病気の増加が心配と話す星さん。山小屋での過ごし方を伺うと、

「次の日の山行に備えてゆっくり休養してほしい。そして、夕焼け、朝霧の景色を見てほしい。宿泊しないと味わえないことです。」と話します。尾瀬小屋では、毎朝、館内に宗次郎さんの音楽を流しているそうです。山小屋に宿泊した方に、尾瀬のすがすがしい朝を感じてほしい、山小屋ではゆっくりして疲れをとってほしいという、星さんの深い思いが感じられました。

▲星さんご夫妻

尾瀬小屋
（檜枝岐村）
■問合わせ先
090-8921-8342
■宿泊料金
1泊2食　8,500円
■営業期間（例年）
5月中旬～10月中旬
■URL
http://www.ozegoya.co.jp/

尾瀬保護財団 平成20年度 事業計画

尾瀬保護財団の平成20年度事業計画が、本年3月17日に開催された第27回理事会・評議員会で決定されました。主な事業計画は次のとおりです。

1 利用者啓発事業

（1）入山者啓発事業

①入山口啓発：主な入山口において入山マナーの啓発、利用案内、ゴミの持ち帰り運動等を実施します。

②尾瀬ボランティアの活動支援：活動拠点の整備やボランティアのための研修会を開催します。

③ガイド利用の普及促進

ア（新）尾瀬認定ガイド制度の構築：ガイド利用による自然体験やエコツアーなどを通じて、尾瀬の自然環境の保全を図るため、ガイド資格の認定制度の検討を進め、認定制度の運営を支援します。

イ 尾瀬自然解説ガイド：ガイド利用の魅力、有用性等を利用者に啓発し、普及を図るため、尾瀬ボランティアを母体に養成した尾瀬自然解説ガイドによるガイド活動を実施します。

（2）自然解説事業

尾瀬沼及び尾瀬山の鼻の両ビジターセンターの職員等により、自然解説活動を実施します。

（3）啓発PR事業

①機関誌の発行：「はるかな尾瀬」を年4回発行します。

②わたしの尾瀬フォトコンテスト：写真コンテストを行い、写真展、尾瀬フォーラムを開催します。

2 施設管理事業

（1）尾瀬沼ビジターセンター等の管理運営（環境省委託）

（2）尾瀬山の鼻ビジターセンター等の管理運営（群馬県委託）

（3）公衆トイレの維持管理

3 調査研究事業（国立公園利用適正化事業）

特定の時期や場所に入山者が集中している現状を踏まえ、利用の適正化を図るための対策を実施するとともに、安全で快適な利用方策について調査研究を行います。

ツキノワグマ生息状況調査を行うとともに対策マニュアルを策定し、危険回避対策を実施します。

4 顕彰事業

研究者から「湿原」に関する論文を募り、優れた業績に対して尾瀬賞を授与します。

5 友の会事業

財団活動に対し、幅広く支援を求めるため、加入を呼びかけます。

6 その他

①尾瀬サミットの開催

開催日―8月31日（日）午前

開催場所―檜枝岐村「御池ロッジ」

②寄付金の募集

特定公益増進法人の認定制度を活かし、財団への寄付を積極的に募るなど、尾瀬及び財団へのサポート体制をつくります。

③物品の販売（特別会計）

尾瀬の自然保護や安全な利用に資するガイドブックなどの書籍・地図、フォトカレンダー等の販売を行います。

④尾瀬国立公園記念事業

新しい国立公園の実現を祝うとともに、広くお知らせするため、尾瀬国立公園記念事業実行委員会により「記念国際シンポジウム」の開催、「尾瀬のお花発見チェックマップ」制作などを行います。

尾瀬ボランティア情報

このコーナーは尾瀬ボランティアに登録されている方のためのページです。

●ボランティア活動が始まりました。

今年度のボランティア活動は5月24日に鳩待峠、大清水、沼山峠の各入山口での入山口啓発活動で始まりました。入山者は少なめでしたが、参加者は啓発活動のほか清掃活動や沼山峠では除雪活動も行っていただきました。参加していただいた皆さんお疲れさまでした。

今年度も多くの方に参加していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

●活動情報

入山口啓発活動やお話ボランティアのほか、各ボランティア活動を実施しますので、参加をご希望の方はメール、電話、FAXでお申し込みください。

○巡回清掃

入山者にごみの持ち帰りを周知するなどマナー啓発を行うとともに、清掃活動を行います。参加者は昼食、軍手、ゴミ袋、火ばさみ、帽子、雨具等をお持ちください。

（スケジュール等は変更の場合があります）

尾瀬沼

・日時／7月27日(日)9～14時
・集合／尾瀬沼ビジターセンター前

至仏山

・日時／8月24日(日)9～15時
・集合／山の鼻ビジターセンター前

○ボランティア講座

新規登録者を中心に、尾瀬に関係する方の講演と入山口啓発活動を行います。

・日時／6月28日(土)12時～29日(日)13時
・場所／山の鼻ビジターセンターレクチャールーム
・費用／宿泊費、資料代等で1万円
・申込多数の場合、ご参加いただけないことがあります。

新職員紹介

―今年度より新しい仲間が加わりました―

◆山の鼻ビジターセンター勤務◆

落合　清勝（おちあい きよかつ）

尾瀬の動植物を愛でるのもすばらしいですが、周囲の山々も日本百名山に数えられる名峰がそびえています。尾瀬に訪れた際には、是非山の景色も楽しんでいってください。

木下　カンナ（きのした かんな）

これから始まる尾瀬での生活。携帯の着信音は鳴らないかわりに鳥のさえずりに耳をすまし、外食できないので手料理を味わい、休日はもっぱら自然観察をしよう。街では味わえない贅沢な時間。みなさんお待ちしております。

吉岡　昌平（よしおか しょうへい）

尾瀬で働ける幸せを日々実感しながら、訪れる皆様のお役に立てますよう、業務に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

◆尾瀬沼ビジターセンター勤務◆

須山　豊治（すやま とよはる）

初めてのVC勤務です。今までの1日だけの尾瀬から、毎日の尾瀬になりますので、変わりゆく季節の尾瀬を感じ、観察してご案内できればと思っています。

上田　陽子（うえだ ようこ）

自然の宝庫、尾瀬！ 色とりどりの花と新鮮な空気で元気になること間違いなし。沢山の方と尾瀬を満喫できることを楽しみにしています。

寄付のお願い

尾瀬保護財団では広く寄付をお願いしております。

当財団は、尾瀬において、利用者に対し自然への理解を深めるための解説活動や、適正な利用に関する普及啓発を実施するとともに、各種の環境保全対策や施設の管理運営等を実施し、尾瀬の優れた自然環境の保全に寄与したいと思っています。

■企業・団体の皆様とより良いパートナーシップを築けるよう、下記の制度があります。

種　類	条　件	特　典
特別協賛寄付	3年に渡る毎年30万円以上の寄付、または一時の100万円以上の寄付	①財団機関誌、財団ホームページに企業等名称、ロゴマーク、メッセージを1年間掲載 ②尾瀬国立公園ロゴマークの取扱要領に基づき使用申請ができ、許可後は無償で1年間使用
協賛寄付	3年に渡る毎年10万円以上30万円未満の寄付、または一時の30万円以上100万円未満の寄付	①財団機関誌、財団ホームページに企業等名称を1年間掲載

■寄付をいただいた皆様に財団機関誌「はるかな尾瀬」を所定の期間お送りします。
■尾瀬保護財団は「特定公益増進法人」に指定されており、当財団への寄付は税の優遇措置を受けられます。
■寄付につきましては、財団事務局（群馬県庁17階・027-220-4431）に御来訪いただくか、財団に御連絡をいただいた上、右の口座にお振込をお願いいたします。

福島県	東邦銀行県庁支店	普通	1078095
	福島銀行本店営業部	普通	0590088
	大東銀行福島支店	普通	1287138
群馬県	群馬銀行県庁支店	普通	0515428
	東和銀行本店営業部	普通	0975531
新潟県	第四銀行県庁支店	普通	1182791
	北越銀行県庁支店	普通	0199366
	大光銀行新潟支店	普通	0837334

特別協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

株式会社群馬銀行
尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として118万円余りを御寄付いただきました。
寄付者からのメッセージ：信託報酬の一部が尾瀬保護財団への寄付となる仕組みの投資信託を取扱っており、多くのお客さまの善意の集大成を寄付させて頂きました。趣旨にご賛同頂き投資信託をご購入頂いた全てのお客さまに深く感謝いたします。

ＤＩＡＭアセットマネジメント株式会社
尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として301万円余りを御寄付いただきました。
寄付者からのメッセージ：尾瀬の美しく貴重な自然を後世に受け継ぐために今回の寄付金が有効に活用され、環境保全の一助となることを期待しております。DIAMはこれからも金融の仕組みを通じて、社会に貢献する資産運用会社を目指します。

株式会社第四銀行
尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として75万円余りを御寄付いただきました。
寄付者からのメッセージ：尾瀬の自然環境を後世まで末永く守り続けるため、今回の寄付金が有効に活用されることを期待しております。第四銀行はこれからも尾瀬の自然環境保護を支援すると共に、地域社会の発展に貢献してまいります。

株式会社東邦銀行
尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として79万円余りを御寄付いただきました。

利根郡信用金庫
尾瀬国立公園誕生記念定期預金「尾瀬のなかま」より284万円余りを御寄付いただきました。
寄付者からのメッセージ：今回の寄付金が尾瀬の優れた自然環境の保全に有効に活用されることを期待しております。お預け入れいただいた多くのお客様におかれましては、地域の自然環境保護に対し、ご理解、ご支援いただきまして誠にありがとうございました。

社団法人日本損害保険代理業協会
尾瀬国立公園記念式典とPRイベントで使ってほしいということで100万円の御寄付をいただきました。
寄付者からのメッセージ：本会は、植林活動や自然保護活動に実績のある団体を支援するための基金を設置し、寄付を行っています。大変美しい尾瀬の保護活動を支援するため、財団法人尾瀬保護財団が尾瀬国立公園記念事業として行う記念式典＆記念ＰＲイベントへの協賛団体として、寄付させていただきました。

Natural Cosmetics
Sanders Perry

サンダース・ペリー化粧品製造元　株式会社ネイチャーズウェイ

化粧品１本に付き３円を積み立てた基金より100万円の御寄付をいただきました。

寄付者からのメッセージ：当社は創業35周年を向かえました。「３円から始まる環境保護活動」として、はじめは小さな一歩ですが私たちの活動を見守っていただいている多くのお客様のご支持を得て、大きな活動に育てていきたいと願っています。

協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

尾瀬山小屋組合

尾瀬保護財団設立当初から毎年、御寄付をいただいております。平成19年度は22万円余りを御寄付いただきました。

群馬県庁福利厚生事務協力会

財団の活動に対し、50万円の寄付金をいただきました。

新潟証券株式会社

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として27万円余りを御寄付いただきました。

株式会社　ロッテ

平成13年より毎年20万円の御寄付をいただいています。平成19年度も御寄付をいただきました。

協賛寄付者(機材)の御紹介

※五十音順、敬称略

キヤノン株式会社

ビジターセンター、財団事務局での情報収集用としてデジタルカメラ７台とハイビジョン・デジタルビデオカメラ３台、およびその他付属機材を御寄付いただきました。

パタゴニア日本支社

春先、晩秋のビジターセンター職員の活動用、冬季の除雪作業用としてダウンジャケット、ダウンセーター計30着を御寄付いただきました。

『友の会』コーナー

「友の会」は豊かな尾瀬の自然を守る財団の活動を支援してくださる方々の集まりです。

年会費

○個人会員……1口　2,000円
○ユース会員(その年度始に22歳以下(1986年4月2日以降に生まれた方))……1口　1,500円
○家族会員(個人会員と同居の家族)……1口　1,500円
○賛助会員(団体・法人)……1口　10,000円

☆新会員制度について

尾瀬保護財団では新しい会員区分としてユース会員と家族会員をはじめました。是非、ご活用ください。ユース会員の特典は個人会員と同じです。家族会員は会員証、バッチは会員数分お送りしますが、機関誌・ガイド類は一家庭分取りまとめて１冊お送りします。
※賛助会員の特典は平成20年度から機関誌のみとなりましたのでご了承ください。

☆卓上カレンダー配布の廃止について

卓上カレンダーについては平成20年度より配布がなくなりました。なお、通信販売は例年通り行う予定です（友の会会員の割引もあります）。

☆平成20年度新規加入の方への会員バッチの送付について

現在、作成中ですのでもうしばらくお待ちください。

☆メールクラブのご案内

「友の会」会員を対象に、登録をいただいた方に尾瀬のいろいろな情報をメールにてお送りする「めーるクラブ」を行っています。是非、ご利用ください！！（登録は財団ホームページから）

イベント情報

尾瀬国立公園記念国際シンポジウム

「みんなで支える新たな国立公園 ―「尾瀬国立公園」のめざすもの―」

日時／7月20日(日)午前10時～午後3時半
会場／小出郷文化会館(新潟県魚沼市)
定員／400名（申込は事務局まで）
☎027－220－4431
(主催／尾瀬国立公園記念事業実行委員会)

尾瀬のお花発見チェックラリー

「尾瀬のお花発見チェックマップ」を持って尾瀬を歩きお花を探そう！30種類以上見つけたら「認定証」を差し上げます。記念品もあたるかも！詳細は事務局まで。
☎027－220－4431
(主催／尾瀬国立公園記念事業実行委員会)

第13回NHKわたしの尾瀬フォトコンテスト

詳細につきましては、同封しましたパンフレットをご覧下さい。

お詫びと訂正

前号（VOL.4）4、5ページのリレーエッセイの写真説明に、(財)尾瀬保護財団事務局の不注意による誤記がありました。お詫びし訂正いたします。

・写真上部に文書もれ
→中田代NN3-23の池の二態

・5ページ写真（上）
誤　中田代　最大露底の池【平常時】
（底の泥炭は見えない）
正　①1996年9月3日 底が見えない

・5ページ写真（下）
誤　中田代　最大露底の池【地震時】
（底の泥炭が水面に露出）
正　②1996年10月21日 底が露出

編集後記

今年度から機関誌発行の担当になりました。尾瀬の様々な情報をお伝えします。（小）

みんなの尾瀬を
みんなで守り
みんなで楽しむ

「尾瀬ビジョン」基本理念

はるかな尾瀬

財団法人 尾瀬保護財団機関誌
2008.06 平成20年6月30日発行
発行所:財団法人 尾瀬保護財団

〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL.027-220-4431/FAX.027-220-4421
E-mail info@oze-fnd.or.jp ホームページアドレス http://www.oze-fnd.or.jp

本誌は、尾瀬の木道をリサイクルした再生紙と環境にやさしい再生植物油インキを使用しています。